

# Come の意味論

## —多重活性化モデルを用いて—

出 原 健 一

### 0 . 序

出原（2006, forthcoming）では、放射状カテゴリー（Radial Category）を用いた意味構造分析にまつわる不備を指摘した上で、新たな意味記述の方法として多重活性化モデル（Multiple Activation Model, 以下 MAM）を提唱し、具体的に自動詞“go”の意味を分析した。そこで本稿では MAM の妥当性をさらに検証するため、自動詞“come”の意味構造分析を試みたい。ただし、多彩な意味を持つ“come”の詳細な意味ネットワークを記述できるほどのスペースがないため、ここでは辞書に載っている“come”の意義をいくつか取り上げ、“go”と対比することで、MAM で記述した場合にどのようなメリットがあるかを示したい。

### 1 . 多重活性化モデル（MAM）

認知意味論の立場から語彙分析を行う場合、放射状カテゴリーの発想に基づき意味ネットワークを記述するということが多い<sup>1)</sup>。認知言語学が現れる以前では主流であった必要十分条件に基づくカテゴリー観に対抗する形で生まれたこのカテゴリー観は、認知心理学<sup>2)</sup>の知見を取り込んだ、認知的実在性のある考え方であり、近年では、語彙のみならず、構文ネットワークの分析においても有力な分析法として用いられている。

しかし、放射状カテゴリーという発想自体は問題がないとしても、その従来

1) 代表的なものとして Lakoff (1987) の“over”の分析がある。

2) 例えば、Rosch and Lloyd (1978)。

の記述方法にはいくらか問題がある。紙面の関係上、ここでは詳細を論じられないが、簡単に言えば、例えばプロトタイプの意味を A とし、そこから B と C の意味が派生し、さらに B から D と E, C から F と G が出てくるとしよう。これを図にして書けば、まさにプロトタイプから「放射状」に意味が拡張しているように見えるが、しかしこの記述法では、B と FG, C と DE は全く関連のないものとして示されてしまう。しかし、特に B と C が A の一部分をプロファイルして出てきた意味であるような場合<sup>3)</sup>, そのようなことは考えにくい。つまり、認知言語学の優れた点の一つであるところのカテゴリー間の連続性が背景化されてしまうのである。また、 $B \rightarrow DE$ ,  $C \rightarrow FG$  の拡張パターンが同様なものであっても、分けて記述しなくてはいけないため、非常に冗長的である。

そこで出原(2006, forthcoming)は、コネクショニズムの発想を取り入れることで、上記の欠点を補える記述法として MAM を提唱した。MAM を使って自動詞“go”のプロトタイプを記述すると、図1のようになる。

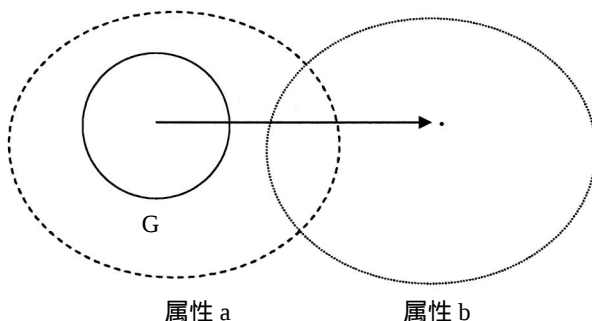


図1

ここで、実線の円は G (グラウンド領域)、矢印はトラジェクターの移動、点は到達点(グラウンド領域の外)を表す。ここまでは従来においてもよく言われていることだが、MAM ではこれを複数の属性に分割する。このケースで

3) 実際、Lakoff (1987) では、“over”の意味として、A は“above”と“across”が合わさったものとし、B は“above”、C は“covering”としている。“across”と“covering”はかなり共通した認知プロセスを持つと考えられるので、この場合でも B と C は A の一部をプロファイルしたものと考えられる。

は図 1 に示してあるとおり属性 a と属性 b とに分ける<sup>4)</sup>。そしてそれぞれの属性の重みづけ（コネクションズムの言葉で言えば「結合強度」）を設定し、その活性度（コネクションズムの言葉で言えば「出力強度」）の変化によって、“go”の意味を記述するということになる。重みづけに関しては、“go”の実際の使用を見ると属性 a の方が重みがあることが分かるので、図 1 では属性 a を太い点線、属性 b を細い点線で記述してある。つまり、属性 a の方が結合強度が強いということになる。

そして実際に現れる“go”の意味は、その活性度によって変化する。空間的意味で言えば、相対的に属性 a が最大に、属性 b が最小に活性化したものとしては（1a）が、逆に相対的に属性 b が最大に、属性 a が最小に活性化したものとして（1b）が挙げられるだろう。

（1）a. My pen's gone; who's taken it?

b. The sofa will go nicely over there.

（1a）では、話者が直接認知できる領域からペンが移動した（なくなった）ことを意味し、どこに到達したかは背景化されている。逆に（1b）では、ソファがどこに「到達」すればふさわしいかが述べられており、その起点は問題とされない。

無論、この 2 つは両極端に位置するもので、両属性の活性度合によって、その中間的事例が存在する（“I've got to go to the bathroom.” など）。このことは、このモデルでは、従来の放射状カテゴリーの図式では表現が困難であった、意味の連続性を表現できるということの意味する。

そして図 1 のような活性化パターンが、空間的領域だけでなく、より抽象的な領域に写像されることで、メタファーの意味が生まれると考える。紙面の関係上、ここでも両極端のものだけ挙げておこう。

4) 分けるといっても、ここでいう属性（attribute）は、構造主義言語学で用いられる意味素成とは異なり、むしろイメージスキーマと考えてよい。図 1 で属性 a と属性 b が重なって描かれているのも、このような理由に基づく。

(2) a. Has your headache gone yet?

b. go armed, go barefoot, go hungry, go in rags, go naked, go thirsty

(2a b) はそれぞれ (1a b) と同様の活性化パターンを持っていると言えるだろう。異なるのは, (2a b) の場合, 実際の空間的移動ではなく, 状態変化のような抽象的領域における意味を表しているということである。

以上, 駆け足で出原 (2006, forthcoming) を概観したが, これと対比させることで, 一般的に “go” の反義語とされる “come” の意味を考えてみたい。

## 2. “come” の意味構造

### 2.1 “come” のプロトタイプ

ジーニアス英和辞典 (第4版) にあるように, 「話し手の所または聞き手の所へ移動する」(386) を “come” の基本義とみなしてよいだろう<sup>5)</sup>。したがって, “go” の意味構造を表した図1内の矢印の方向を逆にすると, “come” の意味構造になると考えられる (図2, 次ページ)。ただし, ここで考慮するに値することは, 起点と終点との認知の違いである。

(3) a. They went there.

b. They came from there.

(3a) には方向を示す前置詞がないにもかかわらず, 「彼らはそこへ行った」という意味にしかない。それに対し, (3b) の場合, 「～から来た」というように起点を表す場合, それを明示的に示す前置詞が必要となる。つまり, 少なくとも英語において, 起点は有標であるのに対し, 終点は無標であるということである。この点を考慮に入れて “come” の意味を考えれば, 図1 (“go” の意味構造) と比較して, 図2 は属性 a と属性 b の結合強度の差はますます開く

5) ここにあるとおり, 英語では「聞き手」の所に移動する場合も “come” を用いることはよく知られており, 非常に興味深い論点であるが (池上2000: 282-284などを参照), 本稿では, 聞き手もグラウンド領域内に入りうると考えるにとどめ, この点について深く論じることはしない。

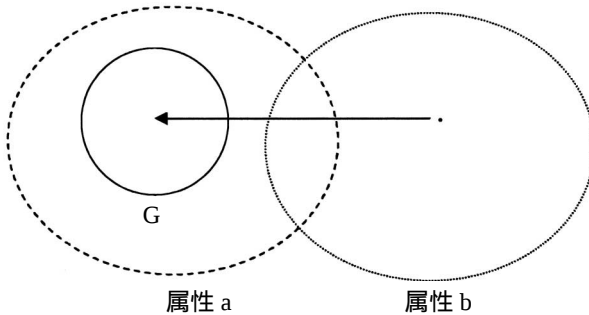


図 2

と予想される。なぜならば、図 1 の場合、属性 b は終点を表しているため、それだけプロファイルされやすくなるが、図 2 では属性 b は起点であり、その分背景化されやすいからである。この予想が正しいかどうかは、当然のことながら、経験的に検証されなくてはならない。以下、その検証を行うが、はじめに述べたように、本稿では“come”の意義をいくつか取り上げ、これらが MAM の中にどのように位置づけられるかを考察する。ここでは、ジーニアス英和辞典の「語義展開図」に基づき、以下の 10 個の意義を取り上げたい。

来る、行く 着く 到来する 達する 現れる ~ の出身である  
 起こる 心に浮かぶ ~ で入手できる ~ になる<sup>6)</sup> (386)

## 2.2 「来る、行く」( )

は“come”の最も典型的な意味と言えるだろう。

(4) Come downstairs. Dinner's ready ( G. 1a ) ( G : ジーニアス英和辞典 )

(4) は属性 a b とともに活性化していると言える。基本的に は、話し手の認知領域の外にある主語 (トラジェクター) が移動し (属性 b), 話し手の認知領

6) 数字は筆者。実際には ~ は の下位分類となっているが、便宜上ここでは並列化して、数字を振った。

域内に入ってくる(属性a)という意味であるから、それも当然である。

このケースでは、両属性ともかなり活性化しているが、この活性度のバランスが変わることで、他の意義が発生すると考えられる。以下で、その点を検証する。

## 2.3 「着く」( )

(5) a. Here comes our train.( G. 2)

b. What time does the next train come?( G. 2)

c. The phone bill has come at a bad time.( L. 4)

(L: ロングマン現代英英辞典)

(5a)は、話し手が自らの視界に電車が「入ってきた」ことを述べているので、属性aが相対的にかなり活性化していると言える<sup>7)</sup>。この場合、「移動」の意味は残っているものの、どこからやって来たか(属性b)に関して、かなり背景化されているからである。(5b c)になると、属性bの意味合い(活性度)も出てくるが、論理的にも、は空間の意味において属性aが相対的にかなり活性化していると考えてよいだろう。ただし、「着く」というからにはどこからか「来る」わけであるから、属性bも若干活性化していると言えるだろう。

## 2.4 「到来する」( )

(6) a. Spring has come.( G. 6)

b. Sunday comes after Saturday.( G. 6)

c. Christmas seems to come earlier every year.( L. 5)

ジーニアス英和辞典で「時・事柄が 到来する、近づく」(387)と説明してあるように、は空間領域から時間領域へと比喩的拡張(metaphorical extension)されることで生まれた意味である。

このことを前提として考えると、(6a)は属性aが相対的に最大に活性化し  
7)(5a)が倒置構文であるということも、この活性化パターンに関与している。

ている<sup>8)</sup>。では想定されていた「起点」も、この場合は考えにくい。(6b c) となると、「時間の移動」<sup>9)</sup>が顕在化してくるが、依然として「起点」は不明である。

以上のことから、は抽象的領域(時間領域)において、[属性 a: 最大, 属性 b: 最小]の活性化パターン、つまり相対的に属性 a が最も活性化している意義と言える。

## 2.5 「達する」( )

(7) a. His hair comes (down) to his shoulders.(G. 3a)

b. My son comes (up) to my shoulder.(G. 3a)

c. These socks come to just below the knee.(W. 12)

d. The bills comes to \$40 plus a \$5 tip.(G. 3a)

e. We're coming to the point where we're going to need financial support.  
(W. 10) (W: ウィズダム英和辞典)

は興味深い意義である。というのは、(7a b)を見ると、「あるものの長さが、(ある位置から)別のある位置まで実際に伸びた」という、具象的現象を単純に表現しているように思われるが、それだけではなく、話し手の心的な<sup>10)</sup>視線の移動が伴っていることに注意しなければならないからである。実際の伸びが背景化されて、視線の移動のみとなった、つまり Langacker (1999: chap. 10) のいう「主体化」(subjectification) が起こったのが、(7c) である。「ソックスをはく時に下から上にソックスの上部が移動してひざ下に到達した」という解釈は、そういった行為の結果という前提はあるものの、かなり苦しいであろう。むしろこのような行為がベース (base) となっはいるが、プロファイ

8) 完了相で用いられているということもあるが、ジーニアス英和辞典には (6a) の記述の後に“( = Spring is here)”と補足されている。

9) “TIME IS A MOVING OBJECT” というメタファーが根底にある。詳細は Lakoff and Johnson (1980: 41-43) を参照されたい。

10) 「心的な」というのは、実際に目で追う必要はないからである。髪の毛や身長伸びを、リアルタイムに見ているわけではない。

ルされているのは「ソックスをはいた状態では、ソックスの上部はひざ下に達している」と解釈するほうが自然である。

さらに、(7a-c)は具象的(空間的)事例であったが、(7d-e)は比喩的拡張によって抽象的領域へと写像された例である。(7d)は(7a-b)と同じ項目に記載されている。(7e)は別項目として記載されているものの、「われわれは経済的援助を必要とする段階まで達しようとしている」という訳文が与えられているということと、ある同一基準の変動を述べているということから、この分類に入れてよいと考えられる。

以上のことからこの活性度について考える。まずは属性aの解釈だが、(7a, b-e)を見ると、「過去から現在への到達」と捉えてよいだろう。当然、「現在」が「話し手の領域」となる。(7d)も、これまで費やした費用の合計が「現在」40ドルに達したと見ることはそれほど不自然ではないだろう。(7c)に関しては議論の余地があるものの、「これまで通常見てきたソックス(のプロトタイプ)の上部と比べると、このソックスに関してはひざ下まで来ている」といった、百科事典的知識が関与した視線の移動と解釈することが可能かもしれない。

したがって、全般的に見ればこれは、明確な起点は示しにくいものの、属性aのみならず属性bもある程度活性化していると考えられる。言葉で表現すれば、「過去のある状態から現在の状態になった」と言えることから、そのように解釈してよいだろう。

## 2.6 「現れる」( )

(8) a. The moon came and went. (G. 4)

b. “How’s the pain?” “Well, it comes and goes.” (L. 10)

(8a)が典型的な例である。この場合、まさに話し手の認知領域に入ってきたことを表現しているので、起点に関しては全く問題にされていない(むしろ、起点が明確に存在していない)。したがって、これは空間的意味において属性aが相対的に最大に活性化していると言えるだろう。

ただし、この活性化パターンは空間的領域のみにとどまらない。比喩的拡張して、トラジェクターが「モノ」から「コト」になった例が(8b)である。興味深いことに、この例文が載っているロングマン現代英英辞典では語義説明が[ to happen or appear ]となっている。つまり、後に見る(「起こる」)が同じ項目として挙がっているのである。実はこのような比喩的拡張は他の領域にも及びやすいようであり、すでに見た(「到来する」)も時間領域に写像された例だと考えられる<sup>11)</sup>。以下にも同様の拡張例と思われる意義が出てくることから、2.1で示した「go」の属性aよりも“come”の属性aの方が、各属性bと比べ、結合強度の差が開いている」という予測が当たっていると言えそうだが、まだここで結論を出すのは早計だろう。さらに事例を見ていくことにする。

## 2.7 「～の出身である」( )

(9) a. Where do you come from? (G 5a)

b. This play comes from a Chinese legend.

c. The best ideas come from jokes.<sup>12)</sup>

は大半が“come from”の形を取る。これは2.1で述べたように、起点は有標なので、“from”が必要となるのである。(9a)が典型的な例だが、起点がプロファイルされているためか、終点(到着点)があまり明確ではない。したがって、相対的に属性bがかなり活性化した例と言えるだろう。

(9b, c)は比喩的拡張によって生まれた例であるが、上記の活性化パターンは基本的に維持されている。

11) 厳密にははまだ移動の意味合いが若干残っているので、活性化パターンはにも似ていると言えるかもしれない。ただし、起点が明確には存在しない点を考えると、より厳密に言えばとの中間的なパターンと言えよう。

ちなみにこのような連続性は従来の放射状カテゴリーの記述法では表現が困難であり、その意味でMAMの妥当性を示すものである。

12) (9b, c)は以下のサイトから引用した。[http://www2.alc.co.jp/ejr/index.php?word\\_in=come+from&word\\_in2=%82%A0%82%A2%82%A4%82%A6%82%A8&word\\_in3=PVawEWi72JXCkOa0Je](http://www2.alc.co.jp/ejr/index.php?word_in=come+from&word_in2=%82%A0%82%A2%82%A4%82%A6%82%A8&word_in3=PVawEWi72JXCkOa0Je)

2.8 「起こる」( )

(10) a. This kind of accident comes when you are careless.( G. 7)

b. The meeting came one month after his resignation.( W. 16)

2.6 で述べたとおり, はトラジェクターがやや抽象化しているだけで, 活性化パターンは と同様に, 属性 a が相対的に最大に活性化している。(10a, b) を見ても, 起点を想定するのは難しい。

2.9 「心に浮かぶ」( )

(11) Suddenly an idea came to him.( G. 8)

も, 頭の中に「現れる」という意味であり, や と同様, 属性 a が相対的に最大に活性化している例である。特にこの場合, 起点を想定することさえ不可能である。

2.10 「～で入手できる」( )

(12) a. This coat comes in all sizes.( G. 9)

b. This PC comes with wordprocessing software.( W. 8)

c. Cars don't come cheap.( W. 8)

は, 辞書に「進行形不可」と書かれているように, 「買うことで自分の手にやってくる」というプロセスを表現しているのではなく, 「入手(不)可能状態にある」といった状態を表している。ただし, この意義はトラジェクターが「商品」に限られることから, 起点は「店」, 終点は「話し手」<sup>13)</sup>ということになる。したがって, この場合の“come”は心的走査(mental scanning)として解釈されるべきだろう。

---

13) (12) はすべて主語に対するアフォーダンスを表している文と解釈できるので, 「観測点の公共性」の見地から, 終点は「話し手」のみに限らず, 「一般の人々」とするほうが正確かもしれない。

( 13 ) a. The car ran from Tokyo to Osaka.

b. The highway runs from Tokyo to Osaka. ( 河上編1996 : 15 )

( 13a ) は実際の移動を追っている連続走査 ( sequential scanning ) の例であるが , ( 13b ) では , 物理的には何も移動していない心的走査の例である。 ( 13b ) と同様の解釈と考えられる。

以上のことから , 属性 a , b とともに活性化していると言える。

## 2 .11 「 ~ になる 」 ( )<sup>14)</sup>

に関しては , 以下の記述が参考になる。

go が通例悪い意味の形容詞とともに用いられる傾向があるのに対し , come は良い意味の形容詞と用いられることが多い。 true, right, alive, clean, short, loose, awake, complete, cheap, easy, equipped, unstuck, clear, good. ( W. 13 語法 )

出原 ( forthcoming ) で詳しく述べたが , 人は正常で良い状態は「自分の領域」であり , 異常で悪い状態は「それ以外の領域」とみなす傾向がある<sup>15)</sup>。したがって , 状態変化を “come” で表現する場合 , 「悪い状態→良い状態」となるわけである。一つだけ分かりやすい例を挙げておこう。

( 14 ) a. The patient's temperature went up today.

b. The patient's temperature came up today.

( Hofmann and Kageyama 1986 : 45 )

( 14a ) ではいわゆる「熱が出た」のであるが , ( 14b ) は何らかの事情で体温が低い状態にあったのが平熱に戻ったことを意味している。

14) の意味となりうる構文は “come to”, “come into”, “come as”, “come to V” など多岐にわたり , 紙面の関係上全てに触れることはできない。そこで本稿では , “come C” の形のみ取り上げることにする。その最大の理由は , 上記の構文は , ~ のいずれかと重なる部分が多いからである。

15) キーワードだけ述べておくと , 認知心理学でいう「ポジティブイリュージョン」「自己奉仕バイアス」が関連していると考えられる。出原 ( forthcoming : 注14 ) を参照。

以上のことから、は「物理的移動」から「状態変化」への比喩的拡張が起こった結果出てきた意義と言える。活性化パターンに関しては、状態変化の結果に焦点が当たっているのは明らかではあるものの、善し悪しというものは相対的な判断であるので、「悪い状況から」という「起点」もある程度活性化していると考えられる。すると、（「着く」）と同様、属性 a が相対的にかなり強く活性化しているものの、属性 b もある程度の活性化があると見てよいだろう。

2 .12 “come” の活性化パターン

これまでの分析をまとめると、表 1 のようになるだろう。



表 1

表 1 は属性 a と属性 b の相対的な活性度の差を示したものである<sup>16)</sup>。真ん中は両方ともに十分活性化されており、左に行くほど属性 a が属性 b よりも強く、右に行くほど属性 b が属性 a よりも強く活性化される。また、「具」は空間移動などの具象的領域、「抽」は抽象的領域を示す。以下、簡単に概観する。

は“come”の最も基本的な意義であり、「起点—経路—終点」スキーマに基づいていると考えられるので、両属性ともに活性化している（ただ、個々の事例によっては起点、経路、終点のいずれかがプロファイルされることもあるので、かなり広範囲な活性化パターンが見られるだろう）。このパターンが「商品売買」という抽象的領域に当てはめられると が生まれる。

ここから属性 a の活性度が相対的に高くなるにつれて、 や が発生し、  
16) ここでは出力強度のみを問題としていることに注意。

最終的に となる。このそれぞれのパターンが抽象的領域に転用されると、からは、からは、と の中間くらいから が生まれる。も比喩的拡張されるが、訳語としては特に新しい意義は生まれない。

属性 b が相対的に高く活性化される意義は だけである。これも抽象化されるが、特に独立した意義は生まれない。

以上のことから考えると、“come” は属性 a の比重がかなり高いといってよいだろう。属性 a をそのまま表しているように見える一方で、でさえ属性 a が全く活性化していないとは言えない。極論すれば、属性 a さえ活性化すれば“come”という語を用いられうるが、属性 b だけでは用いるのが難しいということである。したがって、重みづけ（結合強度）は、2.1 の予測どおり、属性 a の方が圧倒的に高いとすることができる。

### 3. MAM の妥当性 ―むすびにかえて―

本稿では、出原（2006, forthcoming）における“go”のMAMによる分析をうけて、さらにMAMの妥当性を検証すべく、“come”の意味分析を行った。今回は主要な意義のみに絞ったため、より詳細な分析が今後必要であるが、体系的、かつ言語直感にも合致した記述を行うことができた。

最後にMAMの長所を2点だけ確認して本稿を終わりたい。第一点目は、記述の簡潔さである。従来の放射状カテゴリーの記述法では、似たような拡張パターンであっても、意義が異なれば別個に記述しなくてはならないため、無駄に煩雑にならざるをえなかった。本稿で取り上げた10個の意義だけでも、従来の記述法ではを中心として9個の意義が文字通り「放射状に」記述することになるが、MAMでは表1で示したように、相対的な活性度の軸と具象的領域から抽象的領域への軸のみでまとめることが可能である。

二点目は、各意義間の連続性を表現することができることである。従来では、拡張していく際に一度袂を分かれてしまうと、原則的に合流することはない。したがって、互いの関連性を示すことができる部分が非常に限られてしまう。しかし同じ語の意義である以上、関連性がないはずはない。例えば、とは

重なり合う部分も多い。(5a)など,その典型例である。その意味では,MAMはまさに「家族的類似性(family resemblance)」を表現できる記述法と言えるだろう。

他にも,コネクショニズムを基にしているので,理論的に認知的実在性を保障できる点,具象的領域から抽象的領域へと比喩的拡張する際に,その橋渡しの役割を果たす例も組み込むことができる点など,MAMには様々なメリットがある。ただし,無論,問題点もある。複数あげることになる属性は何でも良いのか,何らかの制約が必要ではないのか。活性度や重みづけが漠然としているが,精密な数値化は可能なのか。しかし,このような問題点を論じるには,さらに多くの語の分析を行ってみる必要があるだろう。また近年脚光を浴びだしているコーパス言語学の知見を取り入れることで,数値化にも何らかの光明を見出せるかもしれない。この答えを出すためにも,今後の研究を待ちたい。

### 参考文献

- Hofmann, Th. R. and T. Kageyama. 1986. *10 Voyages in the Realms of Meaning*. Kurosio-shuppan.
- 出原健一. 2006. 「プロトタイプを考える —Goの意味論—」. 京都言語学コロキウム第3回年次大会ハンドアウト. 京都大学.
- . forthcoming. 「Goの意味論 —認知論的視点から—」. 山梨正明他編『認知言語学論考』No. 6. ひつじ書房.
- 池上嘉彦. 2000. 『「日本語論」への招待』. 講談社.
- 河上哲作編著. 1996. 『認知言語学の基礎』. 研究社出版.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Univ. of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- Langacker, R.W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
- Rosch, E. and B. B. Lloyd, eds. 1978. *Cognition and Categorization*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

### 引用文献

- 『ジーニアス英和辞典』第4版. 大修館書店.

『ウィズダム英和辞典』. 三省堂 .

『ロングマン現代英英辞典』3 訂新版 . 桐原書店 .

スペースアルク ホームページ <http://www.alc.co.jp/>